

# 奉納金田比羅山



春

駒台や梢ふがしむの音

礼馬

松尾を治ひおそ常陸帯

白翫

梅咲や種よきお客あも来る

野鷹

新艘の如く七早ふふと哉

白野

真匠不行き花あけ社のま

白意

時津の蔭梅ふ光るゝ急障子

嵯忠

氷の明お窓をふ危後此ま

魯仙

二月や袋の口は解あつて

白喜

二月も是れおちふお米俵

萬庫

雲雀の声を懐ふお枕の形

志厚

爆井の思ふを拂へる此音

常店

夢見の秋おけり産地さくま

鬼淵

能く入地終しつゝさくま

野玉

常や産ちふた終るゝまふま

松亭

常也 庭中 松亭

永交 月也 素蝶

月の 白梅 月橋

草也 木也 岩水

岩也 山也 彩雅

常也 七也 萬山

老也 連也 野月

手也 杖也 顧月

松也 手也 眉紫

其也 雲也 元鏡

端也 居也 嗽石

於也 也 守拙

其也 心也 北野

鶴也 也 三幸

下也 也 白重

日也 也 堂鳥

折也 也 馬洗

雪也 也 白寒

烟也 也 白沢

山也 也 白枝

餘也 也

餘也 也



涼しき奇雲を巻き居る跡  
 雲の巻は流石ぬきさるる計  
 懐多し山も有るを 衣も更  
 松の影の白を打ちりそむる  
 時多し中に出りてかくと影の月  
 只葉もてか生や夏は 月  
 月涼し 裾もかきふる雲は 乾  
 夏の松風は 老しあがり危  
 なる影もやふる雲は 運ぶも 嵐  
 以て涼し床の涼し 大坐安  
 葉の影は 結み若く清水も  
 梅子や甘や 夏もよと中は  
 白雨のよきも 来るも 多し 雨  
 まるく 流水を 障の 住居の 簾  
 御座る 涼し 甘く 涼し 覺  
 盤の 雲は 雲根の 苔は 石  
 雨雲のよはれて 戦く 雲は 雨  
 鴈鴨も 遊ぶ 秋も 青く 月  
 牡丹も 高き 枕も かえり 月  
 孝行の 系も みる こと 竹  
 石火の 影も みる こと 竹

禮鳥 白翫 白野 野鷹 雲鳥 白意 魯仙 白喜 瓦鏡 萬庫 志厚 常唐 鬼淵 野玉 松亭 素蝶 月橋 岩水 彩雅 北野

孝行は三季しむえしこと一行  
 石山の影さへ丸く夜はみ  
 歴七合の月和お初周の扇  
 荒沙の風も哀しく野阿而  
 涼しやほほれ糸と還る小松  
 揺る川を歌も六行の子  
 秋志の心は来る岡極哉  
 雨も雨も漂はるも事おちる  
 子とてをば舞やうた言例子  
 鳥も涼し子も岩の松も清く舞  
 隠る子も糸もかみ所へ蛇も

徳

忘芒山阿々々々公見其不危  
 明月や山を挿ぐ人乗舟人  
 小舟を走らすは月秋哉  
 野阿や山公名はうす月秋  
 清鐘の波り知る秋乃風  
 舞雲の口吹きるは秋のせ  
 枝や葉も其は秋の雲も水  
 三々流石山も今宵の月乃をみ  
 華も雲も空も水も

北野 三幸 白重 白叟 文喬 班彪 菅菰 子行 橋平 馬来

禮島 白野 白意 曾仙 鬼洲 野玉 松亭 白言

三ヶ所山も雪の月乃そよ  
葉小宮庭をまきかき  
初秋の聲酒あふも  
七宮あつき波の案内せん

白言  
竹堂  
橘平  
馬來

冬

幾子代し独同若し  
予者い月の出汐の沖来表  
冬は月もたふの夏ぬ勤  
浪おと汐の力はやも  
冬は楚禁たふ山歩の  
はくくや日白解なり冬  
作て雲記し世初雲  
親く人教者おふし

禮鳥  
白野  
白意  
曾仙  
白喜  
素蝶  
橘平  
馬來

以上

文音

善也古形をそふ  
志をいれ自分い  
時子出たて  
七宮あ人い

江戶  
群鳥  
白紵  
白人  
北溟

耐字出... 七... 有年... 京都 蒼札

右 五梅茶亭東端

日無... 李州

何... 冥契...

三... 名世...

大... 如...

雲... 小梅

東都 五梅茶

畔李

願主

白野

白意

崑忠

魯仙

橘平

右

五梅茶室編

日無松乃棠也向多沐生云云原 李州

何如如... 冥契所臨書阿

三... 名世乃

大如如如如如如

靈小板

東都 五梅茶

畔李

願主

白野

白意

嵯忠

曹仙

橘平

馬來

敬白

天保三年

壬辰七月吉日

梅屋軒

堂藏現書



奉納金毘羅山

印

春

駒鳥こまどりや梢尔こずえにからむ鈴すずの音

八戸

礼鳥

松風まつかぜを結びゆひ逃のがし介けり常陸ひたち帯おび

全

白翫はくがん

梅うめ咲さくや膝ひざよせ類る客け介けふも来くる

全

野鷹のたか

新艘しんそうの加津かつら長閑のどけ支きみ奈なと哉かな

久慈

白野はくの

真直まな行ゆ遣はば花はなあ類る社やしろ可かな南

全

白意はくい

時津ときつ可か勢せ梅うめ尔に光かるや懸障かけしょうじ子

全

嗟忠さちゅう

夜よの明類あけるまじ窗が可けふへ梟梅けり能花の

全

魯仙ろせん

正月しょうげつや袋ふくろの口能解のどけ古こ路ろ

全

白喜はくき

正月しょうげつ毛見もみおちハ奈介はなけ礼米れいまい俵

八戸

萬庫

雲雀ひばり野のを曉尔にす春留はる枕可かな那

全

志厚

爆竹はちまきや悪魔あくまを拂はらう灰能音の

全

常曆

鶯うぐいす盤初はしよて手加てら庵能事いおのら敷しき

野田

鬼溺きえん

能よき人能形のなりも心こころもさくら哉かな

全

野玉

鶯うぐいすや屋末やまぶぶき能花のハ咲尔はさ介に類ける

全

松亭しょうてい

永支ながさ日ひや鶴能居のい眠類ねむ葦能中あしの

岩泉

素蝶

月のおち天て白梅やしろ寒かなき社哉かな

全

月橋

※駒鳥：スズメ目ヒタキ科の鳥。スズメよりやや大きい。鳴き声が馬のいななきに似る。「ひいんからから」。  
※鈴：神社の鈴

※常陸帯：常陸国（茨城）鹿島神社で正月十四日に、帯に男女が意中の人の名を書き神前に供え、神主がこれを結んで縁を占った。

※かつら：桂は船材となる。

※時つ風：時節にかなった風。ちようど良い頃に吹く順風。  
※懸障子：掛障子。小窓に掛け吊るす障子。

※見おち：見落とす。

※雲雀野：雲雀の飛び回る野原。  
※雲雀：スズメ目ヒバリ科の小鳥。スズメよりやや大きい。

※初手：最初。

草や木 <small>に</small> 親能恩志留春の雨	全	岩水
庵 <small>いおに</small> 尔居類日盤人 <small>は</small> も来春 <small>こずはるの</small> 春能雨	一戸	彩雅
鶯 <small>うぐいす</small> も幾可 <small>きか</small> さふといふ宿屋 <small>かな</small> 可難	全	萬山
老津連 <small>おいつれし</small> 之人盤 <small>は</small> 寝安し花盛 <small>ざかり</small>	全	野月
手越 <small>をぬぐう</small> 拭 <small>わ</small> か可 <small>かどぐちの</small> 門口能柳 <small>かな</small> 哉	沼宮内	観月
柏手能 <small>かしわでの</small> おと尔集類 <small>にあつまる</small> 春能鳥	全	貫紫
春雨や神結□□□能□	一戸	眉壽
端居 <small>はしいして</small> 之天梅尔加多留 <small>にかたる</small> や源氏香	八戸僧	瓦鏡 <small>がきょう</small>
繩春 <small>なわすだ</small> 多れ懸 <small>かけし</small> 之李 <small>すもも</small> や桃の花	一戸	漱石
都边 <small>みやこへ</small> や亦突 <small>またつき</small> あ多類梅屋敷	福岡	守拙
春多川 <small>たつ</small> や帽子 <small>ぬげ</small> 脱多類海能面 <small>のおも</small>	侍浜	北野 <small>きたの</small>
鶺鴒 <small>かささぎ</small> 能聲 <small>のこえ</small> 和 <small>や</small> き帝梅白 <small>し</small> 之	久慈	三幸 <small>さんこう</small>
下京 <small>しもぎょう</small> や陽炎 <small>かげろ</small> ひ詠 <small>なが</small> き車道	全	白重 <small>はくじゅう</small>
日能 <small>の</small> みちや花の山より□能山	八戸	□鳥
折鶴 <small>は</small> を母盤飛 <small>は</small> せて梅寒 <small>し</small> 之	久慈僧	馬洗 <small>ばせん</small>
金屏 <small>きんびょう</small> 尔聲 <small>あり</small> 幾成 <small>げ</small> り蛙 <small>かわず</small> 哉 <small>かな</small>	全	白寥 <small>はくりょう</small>
畑 <small>の</small> うち能笑 <small>のわらい</small> 尔 <small>に</small> う古 <small>こ</small> く小家 <small>しょう</small> 哉 <small>かな</small>	全	白沢 <small>はくたく</small>
山畑 <small>が</small> や夫婦可 <small>が</small> 上尔藤 <small>に</small> の者那 <small>はな</small>	大野	白枝 <small>はくし</small>
蛤 <small>はまぐり</small> の崩 <small>か</small> るゝ音 <small>か</small> や朝加春 <small>かす</small> み	五戸	文喬 <small>ぶんきょう</small>

※端居：家屋の端に出ていること。夏の夕方に涼を求めて縁側などに居ること。  
 ※源氏香：お香の一種。

※繩すだれ：繩の簾。

※都边：都の方。

※鶺鴒：スズメ目カラス科の鳥。カラスよりやや小さい。

※下京：京都の南半分。  
 ※詠き：見渡す。

※金屏：金屏風。

※小家：小さな粗末な家。

夏かくなるち可久那類すずりのや硯能海曇 全 班島

ち類花る尔心にせハ新幾夕はしきゆう下う加南 全 車丈

松原尔津につづく久流ながれや春能月 全 蕉秀

ぬくたまる毛もの尔霞にかすみや岡能家の 全 青珠

畑打はたうちや置亭てさり去多留寺能のか年 野邊地 菅菰

漣さざなみ乃届とこく処未までて春能草 全 子行

陽炎能中尔餌にえを蒔まく小舟哉かな 久慈 魯牛

美濃魚尔水みにえり懸かかる柳哉かな 全 如柳によりゆう

寒山能かんざん筭のほうきお於く日や散る桜 全 白貢はくこう

梅可香がや水番みずばんあ幾類淀きるよどの城 全 納胸のうきょう

門出吉之爪よしつかみどり取尔よ之梅藪し 全 白言はくげん

蛤はまぐりや芳野曇吉くもりの能み須能ずのきワ 全 白雪はくせつ

梅寒之母能し転寝王春のうたねわすられ須ず 肥後行脚 竹堂

柳もから毛のとほと遣天長閑也どけてのどかなり 久慈 月歩げつぽ

鶯能海盤うぐいすの万年恵方哉えほうかな 全 橘平きつへい

花尔鳥月日盤は遅之しむぐら葎の戸 全 馬來ばらい

夏

涼しさ也やさしい綺麗つくすを尽春庭の鉢 禮鳥

雲の峯保ほ口能ぬ遣多留草計ばかり 白翫はくがん

※畑打：クワで畑の土を掘り起こすこと。

※寒山：唐代の僧。

※水番：河川の灌漑用の水の番をすること。  
※淀：水の流れがよどむこと。

※恵方：暦のことばで歳徳神の在る方角。

※葎：野原に生える雑草の総称。

懐 盤山ふとろは 尔に 有ありて 李ころも 天がえ 衣更

松可かぜ 勢顔 の 兒うつな を 打はら 奈すず り 者み 良春 春々 々み

時ほととぎすむ 鳥武 武き 出出して 之お 天於 於く 今朝 朝の 月月

只ただ 笑わら 咄は 者かり 加り 李の や 夏能 能月 月

月しすそにか 涼か 之松の 裾の 尔影 加ら まる 忝能 能影 影

夏には の 松な 風けり 尔盤 老も 奈かり かり 鳧

南はくろう 部て 路あお や 馬あらし 楽ら 連れ 天青 青嵐 嵐

籠かごいけにとこ 活し 尔座 床敷 の 間涼 之大 大座 座敷 敷

泰たいざんのへそ 山お 能か 膺な の 緒み み せ る 清水 水哉 哉

梅は 干にう や 甘まる き 盤る 人宇 尔と 末類 類々

夕ゆう 雨だち 能の 一と さ 八わり 来る 真真 昼昼 可可 那那

青あお 春す 多だ 禮れ 水を 隣わ の 侘わ 居い 可可 難難

納すずみどこ 涼顔 床に 兒し 尔は お ち 之は 八かん 甘ろ 露な 奈ら ん

盤わだかま 之松の 忝松の 能は 岩な 根の や 苔の 能は 者な 那

雨くづ 雲て の 久そよ 津よ 津ぐ 天戦 戦く 青青 田田 哉

蝠こうもり 蝠と 登ぶ 遊よ 不不 夜夜 も 有有 り 水水 能能 月

牡ぼたん 丹丹 寝ね よ 高高 き 枕枕 を 加加 え 呉呉 ン

孝の 行も 能し 二し 葉し 毛こと み え 之之 竹竹

石し 山の の 影影 さ へ 丸丸 之之 夏夏 能能 宇宇 み

白はく 野野

野の 鷹鷹

鶯鶯 鳥鳥

白はく 意意

魯ろ 仙仙

白はく 喜喜

瓦が 鏡鏡

萬萬 庫庫

志志 厚厚

常常 曆曆

鬼き 渕渕

野野 玉玉

松しょう 亭亭

素素 蝶蝶

月月 橋橋

岩岩 水水

彩彩 雅雅

北きた 野野

三さん 幸幸

※ほを…穗尾？

※青嵐：青葉の茂るころに吹くやや強い風。

※泰山：高く大きな山。

※青すだれ：青竹で編んだ簾。  
※水を隣：もらい水。

※甘露：甘味のある液汁。

※ことし竹：今年生え出た竹。

※石山：石の多い山。

曆にも合ひ比し之ひ日より和よ与は初つ团うち扇わ

白重はくじゆう

※日和：晴天。

荒汐の能の小風のも早し之せ蝉み時し雨ぐれ

白芻はくりよう

涼し之のさや往ゆ来き能の舟のと蜚あま小こ船ぶね

白枝はくし

※蜚小船：海人（あま）の乗る小さな船。

膝丈ひざたけの川を越こ連え行は行ぎ々よう子ぎ

文喬ぶんきやう

※行々子：ヨシキリ。スズメ目ヒタキ科の鳥。鳴き声が「ぎよぎよし」と聞こえるため俳人は行々子と詠むという。

船士ふなかたの呼よれば尔に来きた多た留る田た植ち哉かな

班鳧はんぷ

時ほととぎす鳥に雨れ尔て濡ぬ連れ天てんも□可かおちぬ

菅菰かや

※時鳥：カツコウ目カツコウ科の鳥。カツコウより小さい。

子と登か可た多た類る聲に尔は盤し高ぎ之よう行ぎ々よう子し

子行こぎ

鳥涼しちりやう之の千ち嶋の能に松ま尔る濡ぬ留る聲こえ

橘平きつへい

※千嶋：多くの島。

隠かく連れ奈なよ我がも加かくれれ之の蝸かたつむり牛うし

馬來ばらい

秋穂

花はな芒すずき山あた阿あ多たら敷しく見にせ爾けり鳧ひ

礼鳥れい

※花芒：花薄。穂の出たススキ。

明あか月つきや山を掃はく人らく楽な那人な

白野はくの

小茶おちやまん露つゆ一いっ者ぱい以い能の月つ夜ばい哉かな

白意はくい

鳴し多ぎ川たつや山はち八しやう合の能のう寸す月げつ夜や

魯仙ろせん

※鳴：チドリ目シギ科の鳥。  
※八合：山の八合目。

清滝を越わた涉せり初そ介めり秋あき乃の風かぜ

鬼溺きえん

毬栗い能が口ぐり明あき過す類ぎ秋るの可かせ

野玉のたま

栈かけはしや気け高だ支か秋き能の雲のと水みづ

松亭しょうてい

※栈：掛橋。険しい崖などに板などを渡した橋。

三のヶ路の能の山のも今いま宵よの月つき乃の毛の

白言はくげん

あさがおにつゆ げなるつらな  
薺 露寒遣奈留難面さよ

竹堂

のこえ ならず ならず  
初秋乃聲海奈良春空奈良須

橘平

たなばたや か し あない  
七夕也ち可き渡之の案内せん

馬来

冬

つぎめ ことみうり  
幾千代も継目ハ長し曆賣

礼鳥

たつ しお おきかひよう  
千鳥多川月の出汐や沖華表

白野

の たる 見え うつぼかな  
冬能日も太留みのミへぬ靴哉

白意

はしおにゆづ  
潮おとハ汐尔由津るや冬木立

魯仙

ふゆもり夢に からのやまあるき  
冬籠梦尔た可良能山歩行

白喜

はのぼりけ  
津久く登日ハ昇介り冬木立

素蝶

さき なしものつや  
竹咲て雲起させ那霜乃通夜

橘平

おやおやおしえは なじ むかえ  
親く乃教盤お奈し神迎

馬来

以上

ぶんおん  
文音

の はそつと見たばかりで  
春能□や朝盤そとみ多計ても

畔鳥

れぬを い わ の  
忘連奴遠匂ひとい王ん梅能道

白納

ほととぎすで て はた か ず  
時鳥出よと天空盤太可れ寿

白人

に た ありてしう  
七草や人尔い太き安李處

北溟

あおやぎ の の ちようず  
青柳や浦乃流能朝手洗

有年

江戸

宮古

仙臺

八戸

江戸

※幾千代：多くの代。

※継目：跡継ぎ。

※華表：鳥居。

※靴：矢を入れて背負うもの。

※棧：掛橋。険しい崖などにいたなどを渡し  
た橋。

※竹咲きて：なかなか世の中にないもの。

※文音：書簡で寄せられた俳句

※芥子：ケシ科の越年草。五月頃、白色・紅  
色などの四弁花を開く。  
※そとみた：そつと見たの意？

※青柳：葉が茂って青々とした柳。  
※手水：手や顔を洗う。

何可奈と袋さ可せハ雁能聲

江戸

未風

桜持帝人盤帰類爾旅乃そ良

京都

蒼虬

右

五梅菴裏婦

李州

日盤松乃上尔於止川帝弥生可南

※弥生：三月。

何尔加之子よみ帝

お久類登冥加の御端書阿り天

※冥加：神仏の加護。  
※端書：書き添えた文章。

止之盤世乃

太加羅能数楚

雪尔梅

東都 五梅菴

畔李

※東都：江戸詰めであった。  
※五梅菴畔李：八戸藩七代藩主南部信房。

願主 白野

藩主の句を頂けるほど久慈地方の俳諧が盛んであることを示し、梅星軒馬来らを中心とする俳人たちの活躍を知ることができ

同 白意

同 嗟忠

同 魯仙

同 橘平

書林 馬来

敬白

天保三年

※天保三年：一八三二年

壬辰七月吉日

梅星軒

八重歳現書

印

※梅星軒八重歳現書：梅星軒馬来が八十歳で揮毫。

※雁：ガンと同じ。カモ目の鳥のうち大形の水鳥の総称。